

## 気分屋の私

石川 秀幸

私が91歳まで長生きできたのは、進歩した医療技術のお陰と感謝している。若い頃から酒はあまり飲めなかったが、タバコが大好きで煙を肺に吸い込む時は、「何と美味しいだろう」と、何時も俵せ一杯の気分で吸っていた。60歳を過ぎても病気知らずに、積みブロック工場で夜遅くまで残業したことも多かった。

或る日突然、工場で作業中呼吸困難になり、横浜南共済病院へ入院した。肺気腫と診断され「煙草が悪いのは当然、その上にセメントの粉塵が極めて悪い。工場での仕事は命を奪います」と強く言われた。仕方がない後継者が居ないので悔しいが、『日本工業規格表示許可工場』を閉鎖した。

81歳の夏、定期健診で「肺は異常無いのですが、心臓が大きくなっています」。すぐさま心臓内科の先生の診察を受けた。「大動脈と心臓が2センチ近く大きくなっています。心臓外科で大動脈弁閉鎖不全症換置手術を受けなさい。お歳も80歳を過ぎたので無理にとは申しません」。大変な手術と聞いて恐ろしくなった。決断できないまま「手術を受けないままであの世とやらに行こう」と思った。

翌年の春、夜寝ている時胸が苦しい。どうせ死ぬのなら手術を体験してみよう、と気分がかわった。そうだよそうだよと、久里浜で地方文書の講師をしている私の背中を、押して呉れたのが古い仲間たちであった。

7月に検査入院をした。総てのリスクを取り除く為の、細やかな検査なのだ。8月2日、遂に手術のための入院となる。3日、横須賀中学の同級生上林君が見舞いに来た。広瀬君の伝言だ「現在は心臓手術が大層進歩しているので、安心して執刀医に総て任せろ」。この言葉が私の不安を一掃させてくれた。広瀬君は慶応大学の医学部を、上林君は同じ慶応大学の経済学部を卒業していた。

7日朝8時半、不安が総て消え去った穏やかな気分で手術室に入る。麻酔で意識を失う。夢を見た。吉野山の後醍醐天皇北向き御陵の傍の黒い変成岩だ。懐かしかった。翌8日の昼頃、意識が戻り親族の、笑顔に会うことが出来た。

集中治療室で執刀医の橋山先生が、「臓器や皮膚がもろけているので、縫合に手間がかかりました」と。10日、集中治療室を出て個室に戻る。16日、橋山先生が「明日退院です。貴方の回復力が珍しい程早いのです。普通は手術後3週間の入院ですが、貴方の回復力が良いので、2週間で宜しいのです」。

もろもろにもろけた臓器や皮膚のわたしを、執刀医が驚く程早い回復力と褒めて呉れたのは、気分屋の私であった為かも知れない。その気分はイライラせず、穏やかな気分なのだと思っている。ぶつかると直ぐに紫色の痣(あざ)を眺めている。

それにしても、横須賀中学時代の友達の友情に、支えられて来た私の生涯と思っている。

(検索=F1F2宇都宮)

## イジメを知らない中学時代

石川 秀幸

昭和十八年四月に横須賀中学に入り、二十三年三月に卒業するまで、私たちは「イジメ」を知らなかった。卒業後何年か過ぎ、毎年恒例の同窓会に、鈴木忠雄君が初めてやって来た。「これから横須賀に住みます。名前は後藤に変わります」と挨拶。上町の後藤産婦人科へ婿に来て素晴らしい美人を妻にした。鈴木君は中学三年生の時に転校して来た。「恐らく苛められるだろうと覚悟していたら、全然苛められない。横須賀中学はいい学校ですねえ」と言う。「そう言えばイジメを知らない。多分親父は軍人が多かったので、転勤の為に横中生の転出・転入が多かったせいだろう」と答えたが、この時改めてイジメの過去を振り返ってみた。

一年生の時、誰かが「戦艦陸奥が呉軍港で爆沈した。でも吉村君には内緒だよ」。吉村君の父が陸奥に乗っている海軍将校と知っていたから。暫くして吉村君は教室に居なくなった。黙って転校した。

昭和十九年九月、天皇・皇后両陛下の御真影を奉納する奉安殿を、空襲から遁れる為、校舎の裏の崖に横穴式防空壕を掘った。一学年六組の一組五十人単位、一時間交替で作業した。作業責任者は村井先生である。私たち二年四組は鶴嘴（つるはし）・鍬・スコップ・鑿（たがね）・金槌・パイスケを手で、一生懸命に作業した。忽ち汗まみれ、土まみれになる。

現場視察に来た村井先生が、血相を変えて「全員整列」と怒鳴った。訳が解らない尻、私は真っ先に並んだ。全員が並び終えないのに、先生の握り拳が両頬にダブルパンチ。物凄く痛い。一列に並んだ生徒を一人ずつ往復拳骨（げんこつ）を喰らわせた。一番最後の亀井君は「あまり痛くなかった」と、後で話して呉れた。私は「皆一生懸命に作業しているのに、村井マンキンタン（渾名）に殴られた。全員で職員室へ押しかけ理由を糺そう」。仲間から「そうだ、そうだ」の声が上がった時。船岡君が済まなように「俺が鑿にハンマーを叩き付ける時、マンキン、マンキンと怒鳴りながらやっていたら、マンキン野郎が後ろに立っていた。申し訳ねえ」と言う。「それではマンキンが怒って当り前」と、誰一人船岡君を責める仲間は居ない。

この文章を書いているのは平成最後の三十一年二月。あの頃は個人の過ちはクラス全員が責任を負うと言う気風だった。それが中学時代の懐かしい思い出だ。戦争が不利になり学校へ行かず、海軍航空技術廠へ勤労働員、敗戦後も続く食糧不足。しかし、生徒たちの友情は大層強かった。「イジメ」のエネルギーの鋒先は生徒ではなくて、先生に向けていた。渾名の無い先生は居なかった。其の挙句に豪気節数え歌まで創って楽しんでいた。

一つとせ ひっかりやれよと豊作がインキン掻き掻き前へ進め そいつは豪気だねえ＝教練中村先生  
二つとせ 古い狸のニコチンがサーチ・サーチ（即ち）と廿年 そいつは豪気だねえ＝英語宮脇先生  
三つとせ 見れば見る程飽きがるチョコ髭生やしたスケの顔 そいつは豪気だねえ＝英語上田先生  
四つとせ 横中と言えば思い出す教壇ダンスのモルモット そいつは豪気だねえ＝英語中川先生  
五つとせ 何時もホラ吹く顎さんの朝鮮・満洲大旅行 そいつは豪気だねえ＝地理笹子先生  
六つとせ 昔も今も変わらぬは黒チビ・豆さんの丈比べ そいつは豪気だねえ＝□□・稲田先生  
七つとせ 何とかかんとかケチ付けて文句を言いたいチンドン屋 そいつは豪気だねえ＝教練□□先生  
八つとせ やっと生やしたチョコ髭を三日で落とした番頭さん そいつは豪気だねえ＝教練□□先生  
九つとせ 工作室の御大将いつも小言の杓文字（しゃもじ）顔 そいつは豪気だねえ＝工作□□先生  
十うとせ 翔んだり跳ねたり踊ったり横中名物蛸踊り そいつは豪気だねえ＝体操稲嶺先生

## 市井の君子後藤ドクター

石川 秀幸

後藤ドクターは横須賀市上町の、産婦人科病院の院長さんである。背が高く、いいマスクの男である。その上に人相がすこぶるいい。

彼との出会いは旧制横須賀中学三年の秋、即ち敗戦の年であった。他の中学から転校してきた。その時名前は鈴木君と言った。私が中学に入ったのは昭和十八年で、横須賀には海軍軍港・工廠があり、軍人の子弟が多い学校だった。軍人は転勤が多らしく、同級生の転出・転入に影響する。敗戦後は特に顕著だった。その中の一人が鈴木君で同じクラスだった。五年で卒業する時は別々のクラスなので、大分過ぎてから慈恵医大に進んだと聞いていた。

私たちの横中37期・横高1期卒業同窓会を毎年開いていた。横須賀に住み続ける連中が幹事となっていた。何時の間にか私も幹事になっていた。

三十歳を過ぎた頃だった。鈴木君が初めて姿をみせた。「珍しい顔に出会えるのは幹事として特に嬉しいね」と笑顔で迎える私に、「今横須賀に住んでいます。鈴木から後藤に変わりました」。傍に居た友人が「お前知らなかったのか。上町の後藤産婦人科病院だ。美人の奥さんだぜ」。そうか、婿にきたのか。後藤さんはその後、毎会同窓会に出てくれた。

四十歳を過ぎての同窓会の二次会で、「後藤さん貴方と隣合わせの席は初めてですね」と話す私に「幹事さんが毎年同窓会を、開いて下さるのを心から感謝しています。それにしても、横須賀中学の校風って、何て素晴らしいんだろうと思っています。僕は横中へ中途転校して来ました。いじめを覚悟していたら、全くいじめられませんでした。今夜の同窓会も素晴らしい」という。答える私「転校生は戦時中から多かったので、異質の仲間という気がしない為でしょう。物が無い時代に友情は豊かでしたねえ」と。

五十歳を過ぎた同窓会の二次会は「綺麗どころ」に決まっていた。「後藤さん 貴方は若い。我々よりも十歳若く見えますね。流石に仕事で女性の隠された顔を、見ていると若くなりますかねえ」と、言う私にすぐさま肯定する。「そうなんですよ石川さん。僕はねえ、職業柄隠された顔を見るんですが、その顔を見れば何処の誰さんと直ぐに判ります」綺麗なお姐さんたちも大喜びでした。後藤さんは幅のある人とその時知った。仕事熱心な彼の評判は大層いい。それに加え深い教養と相手の冗談に、倍加する洒落で返して来るとは、ただ者では無い。

後藤さんは横須賀南ロータリークラブの会員である。会は社会奉仕を目的とする世界規模の組織で構成され、会員（ロータリアン）は地域の名士が殆どである。上部役員をガバナーと称し、名誉な役で誰にでも出来る役ではない。ロータリアンから信頼され、教養と円満な人格に加えてユーモアをも備え持つ人がガバナーになっている。更に三年間自分の職業から離れ、会の為に奉仕出来る経済的に、強い基盤の人物なのである。

六十五歳を過ぎた同窓会に後藤ドクターの姿が無い。南横須賀ロータリークラブの会員から、既に後藤ガバナーが誕生した話を聞いていた。さすが後藤さんは相応しい人物と感じ、私は「市井の名君」と名付たいと思った。

「市井の名君」は三年間同窓会に出られなかったが、今年の五月の同窓会へ元気にやって来た。「ガバナーになったお蔭で、倅（せがれ）が大学病院から上町の病院に来て呉れた」と嬉しそうに話して呉れた。後藤ドクターとして社会奉仕に貢献出来た。その上、後藤家にとって嬉しいことに、産婦人科病院の後継者が働いている。これからまた、彼と楽しい会話が弾むことになるだろう。